

<書評>

河合隼雄著 河合俊雄・田中康裕・高月玲子訳 河合俊雄解説

日本神話と心の構造

—河合隼雄ユング派分析家資格審査論文—
岩波書店

西村寛子

河合隼雄は日本ではつとに著名な人物である。それは心理臨床家として、また日本での初めてのユング派分析家として、そこで取得、体得してきた知見等を親しみやすい語り口、名文で、多くの著書に起して世に問い広めてきたからである。その著書は専門の心理学関係者を対象とするだけでなく、広く一般読者に向けてもわかりやすく述べ伝えられている。河合はひとの、日本人のこころの理解に命を賭け、カウンセリングとは、心理療法とは、そして東洋と西洋の異なるところ、日本人の心の深層とは、と生涯問い続けてきた。また多くの文化人とそのようなテーマで交流、対談を行い、対談集を編みそのようにして多方面、多角的に日本の文化に多大な影響を与えてきている。一方、還暦を迎えてからは、学生時代に手にしたことのあるフルートを本格的に習いはじめ、フルート演奏会と講演をミックスした舞台に立ち、河合隼雄ファンの聴衆を沸かせたりもしていた。河合隼雄は、大変に精力的にそれらの活動を続ける一方で、文化庁長官の公務を負っていた2006年8月、突然病に倒れ、2007年7月に没した。その時、79歳であった。

その突然の死を悼み、その後河合隼雄についてのいくつかの著書が編纂され、記念誌の発行、CDの発売等も行われたりしているが、ここに紹介するのは、その中の一つで、それまでも河合隼雄の著書を多く発行してきた岩波書店が企画、2009年9月に上梓した3部作といってもいいもの、「臨床家 河合隼雄」谷川俊太郎・鷺田清一・河合俊雄編 「思想家 河合隼雄」中沢新一・河合俊雄編 「日本神話と心の構造—河合隼雄ユング派分析家資格審査論文—」河合隼雄著、河合俊雄・田中康裕・高月玲子訳 の、その中の一冊である。

紹介の書、「日本神話と心の構造」は、主に3部構成になっている。

まず第一部に当る初めの論文は、この書のうちで量的にも一番多くを占めている「日本神話における太陽の女神像」である。これは著者がユング派分析家の資格を取得するために、ユング研究所に提出した1964年の英文の論文を、同じくユング派分析家の子息河合俊雄を中心とした訳者らがこの度和訳したもので、英文も添えられている。河合隼雄は1965年、37歳で無事ユング派の資格を取得して帰国、以降日本で初めてのユング派分析家としての活躍のスタートが切られた。そういう意味でこれは記念すべき論文であるが、それだけではなくそのこと以上に、河合隼雄の思想のはじまり、その後の展開、それ以降の発展に連なっていくすべてがここから始まってきていることがよく理解され、確かめられる点でとても意義深く、また資料的価値も高い。河合隼雄が日本を<母権的心理社会>と捉えたり、<中空構造論>を展開していったことは、河合隼雄を知るひとにはつとに有名であるが、それらのすべての要素は、すでにこの始まりにすべて含まれていたということが了解される点でも貴重である。

二部にあたるものは、一部に提示された論文から20年後の1985年、河合がスイスのエラノス会議に招待されて英語で行った講演「日本神話における隠された神々」の講演録〔資料〕で、第一部で取り上げていたテーマがさらに絞られ、日本神話を構造的に捉えて日本神話のうちの隠された神々にスポットが当てられているものである。この訳にも原文が添えられている。

三部に当るのが、訳者でこの書の編纂の中心的役割をとっている河合俊雄が、その前の二つの論文を解説し、河合隼雄を読み解いている〔解題〕「河合隼雄と日本神話」である。父・河合隼雄が取り組んできたテーマを同じくユング派の分析家として客観的に捉え、読者にわかりやすく解説しているのだが、その抑制がきいていて明快な文章のなかに、息子として、分析家として、日本人としての河合隼雄への思いや、河合隼雄が成したこととそのテーマをめぐる、そこに残された課題を引き継いでいこうという決意や、熱い思いがそこには秘められているように感じられる。

一部、二部の論文や、講演録から入っていきにくい読者には、河合俊雄の〔解題〕「河合隼雄と日本神話」の解説から読みすすめると、興味深く親しみをもって、一部、二部にあたることができるであろう。というのも、河合隼雄の、独特のリズムと心地よい名文の著書に親しんでいる読者がそれを期待して訳書である論文や資料をまず目にとると、初めは戸惑うかも知れないからだ。しか

し、英文も添えられているので、日本語とはまた別の、英文での河合隼雄体験も可能である。解説者・河合俊雄によると、欧米人を対象に提示されている文章であることと、元々の、日本語と英語の違いもあり、英文では明確な語り口でありぐいぐい先を追っていく勢いのある文章だと、感想を述べている。また日本でのいくつかの重要な、著名な書も、初めは海外で講演を行った後に、それをもとにして書として仕上げているものが多いとも指摘している。思想の成り立ちには、英文という、日本語よりも明確な言語で思考していくことが大いに役立っているということであるようだ。そのような点で、日頃の河合隼雄の日本語の文章と英文を比較したり、味わってみるのも、上級者の読者には興味深いことだろう。

ここで少し解説的なことをすると、なぜユング派分析家の資格審査論文に日本神話がテーマとして取り上げられているかということである。

ユング派の資格を取得するには、資格候補生はこと心理学関係に限らず、様々なテーマの講義を受講したり、何人ものクライアントと面接をして、それをもとに1対1で指導教官から一定時間の定められた指導を受けたりすることが義務づけられている。が、ことのほかその中でもさらに重要で中心的な修行的な作業は、教育分析といって、ユング派では自分の見た夢を記録し、それを主な中心にすえ面接を受け、対面して同一の指導者とそれらのことについてずっと語り問いつづけ、自己を分析していくという指導、訓練を受けることである（正確には忘れたが、100時間は超える長時間と聞き及んでいる）。僧侶になるのにも厳しい修行と、指導僧と問答をしたり、座禅を組んで自己と対峙したりする長い時間が必要であるように、ユング派分析家を取得するためにも教育分析という修行的な時間は必須でありそれを中心に研鑽を積んで、最短でも資格取得には三年はかかるときいた記憶がある。

では教育分析の材料としてなぜ自分の夢を語るのかという点だが、フロイドの精神分析や、ユングの分析心理学は、深層心理学という範疇に入るのだが、その考え方の基に、我々の心は、自分の気づいているところはこころの全体からすると少なく、もっと<こころ>の奥深くの、多くのものや知り得ないこと、把握できないところによって成り立っているという考え方、仮説に基づいているところにある。ここではフロイド派との違いを述べることは省くが、ユングの深層心理の捉えかたは、我々のこころの深層は、個人的無意識と、さら

に深く広きにわたり普遍的無意識を持ち、そこには人類に共通するようなもの、こと、世界、宇宙をもつというものだ。しかしそれは実体としてこのようがあると考えてしまうと違ってしまい、その深層世界は宇宙の謎のようにはかり知れないのだが、イメージとして立ち現れたり感じることが可能である。一面的であったり、狭められた生き方をしているために生きにくさが生じているクライアントに対して、ユング派の分析、治療、面接の目標は、その個人的、普遍的深層世界の一端をカウンセラーという同行者を得て、本人が受け止め感じ取ることにより、深層で得た財を安全なかたちに現実世界に持ち帰ることによって、今迄の自分の生き方をより豊かにさせ、生き生きと生を生きていくということにある。それでユング派では、古くから語り継がれてきているメルヘンや、昔話、神話などをそのような人類に共通する深層に繋がっていく心の遺産、大切なものとして扱ってきているし、個人の深層への通路、探求の道、個人神話へ至るものとして夢を大切に扱ってきている。夢は私たちのこころのなかの自然、自然の宝庫である、として。

よく僧としての修行中に、夢でお告げを受けたとか、それが悟りの境地を開いたというエピソードを聴くこともあり、イメージである姿が立ち現れたということも知られている。仏教の世界においても、ある場合には夢、イメージはきっと非常に意味深いものであろう。ユング派でも、深い体験やビッグドリームと思われる夢体験をヌミノース体験、靈的体験と捉えることもある。

私のつたない解説的なことはこのくらいにしておきたいが、河合俊雄が推測するように、河合隼雄も教育分析を受けて自分の夢を語ることで、その結果、日本神話、そのなかでも太陽の女神像を資格審査論文に選んだことには、切っても切れない関係があったことであろう。それは河合隼雄が論文の序文に、なぜ日本神話、その中でも太陽の女神を論じることにしたかについて、長い分析体験がかなり西洋化していると思っていた自分の「日本人の心を目覚めさせた」「日本を再発見するための長い道であった」「日本人の心にもっと深く降りてゆくには、日本神話が最も有用であることにも気がついた」「神話を読むことが、日本人全般にとどまらず筆者自身を理解する助けとなったのである」と述べている。「なかでも一番驚いたのは、日本神話では、太陽が女性であるということであった」そしてこの日本神話の探求は「どこまで行っても、個人的な意味と関心が学問的なそれを優っているように思えてならない」とも述べられている。この序文で図らずも述べているのだが、個人的な動機が優って、自

己探求の思いが続くことで、日本神話探求が、河合隼雄の生涯最大のテーマとなっていくたのであろう。

さて、第一部、「日本神話における太陽の女神像」の第一章は「神話」である。この章で取りあげる神話部分に焦点を合わせ、1. 太陽の女神アマテラスの誕生から 10. 太陽の女神の孫への国譲り までの神話内容を紹介している。この書全体を通してだが、資料としては古事記をより中心に、時には日本書紀を主に引用したり、他資料も参考にしつつ、太陽の女神アマテラスと、その弟嵐の神スサノヲとの攻防、劇的なやりとりとその後の展開が時系列を追って紹介されている。しかし一方で、1. 太陽の女神アマテラスの誕生のとき、アマテラスと、ツクヨミノミコトと、スサノヲの誕生があり、その後奇妙なことに中心的なツクヨミの登場がないことに触れたり、挿入的に、世界のはじまりはどのように記述されているかの紹介があり、4. 世界のはじまり に『古事記』からの引用として「天と地がありはじめたとき、高天原に生まれた神々の名は、アメノミナカムシノカミ、次にタカミムスヒノカミ、次にカミムスヒノカミ、これらの三柱の神は、みな全くの一人神であり、その現し身を隠した…」とある。ところが、中心のアメノミナカムシは、以降全く登場しないこと、5. 国生みと神々の誕生では、イザナキとイザナミ（アマテラスとスサノヲの両親）の結婚式的儀式のときに、失敗して不運な子、ヒルコ（水蛭の子）をもうけ、ヒルコは葦の船に乗せ流される、とその様を取り出し記述している。

10 の、太陽の女神の孫への国譲りでは、重要な場面で、アマテラスの傍らに最初の三柱の神（トライアッド）のうちのタカミムスヒは常に控えていることや、カミムスヒはスサノヲ側に登場するが、アミノミナカムシは初めの記述以外いっさい登場せず、次の三柱の神のうちのツクヨミも登場はほとんど別記以外はなく、アメノミナカムシもツクヨミも中心でありながら「無為の基盤であり、その基盤の上に他のあらゆる活動が生ずる」と河合隼雄は指摘している。

「無為の中心」についてと「ヒルコ」をどう捉えるかということについては、共にこの論文の主要なテーマではなく、20年後のエラノス会議での講演のテーマ「日本神話における隠された神々」で中心的に据えられ、そこで多くを語ることになるのだが、すでにこの資格論文の第一章から「中心でありながら無の基盤であり、その基盤の上に他のあらゆる活動が生ずる」ということを河合隼雄は読み込んでいたし、「ヒルコ」の追放についても印象深くその情景を取り

出してきた。ここから「ヒルコ」についての、河合隼雄の深く長い思索がはじまっていったところと推測されるところである。そして二章ではさらにストーリーから構造が推測され、その特徴が立ち現れてくるわけである。

第二章は「太陽の女神の像」である。太陽の女神アマテラスを中心にスサノヲを絡めて、様々な角度からストーリーの内容が読みこまれ分析、検討されていく。その分析作業を通して、河合隼雄はどうしても日本神話から、西洋と東洋の違い、東洋と西洋との物事に対しての対決の仕方の差を感じ取らざるを得なくなる。日本神話に分け入り深く内容の検討を行った結果、日本神話の特徴としては、物事に対してどこまでも対決していく姿勢よりも、大いなる妥協や、物事へのバランスの取り方を感じざるを得ないと述べている。その辺りのことは直に読み手が確かめていく楽しみに委ねたい。

20年後の講演録「日本神話における隠された神々」は、やはり中心的にはアマテラスとスサノヲを巡る神話を取りあげられているのだが、初めから、目立たない神々がむしろ重要な役割を演じているという構造に注目して語り始められている。その辺りは、第一部と共通するところと、注目点が移ってきているところに、焦点づけて読み進むと、興味深いところである。構造についてははっきり、中空という捉えかたやその構造への命名「〈中空構造〉と考える」という記載もあり、中心が空であるというふうに日本神話の構造を読み解いている。これは本当にすごい読み解きであると、すでに有名で河合隼雄の説くこの構造論を当たり前のように思ってきた私も、改めてその思いをこのたび深くしたことである。中央にしっかりと一神教的な神を据えている世界との違い、西洋と東洋との違い、文化の違い…。日本の歴史的なこれまでのプロセスや、河合隼雄も触れているが日本の天皇制のかたちについてなど、中心を巡る構造を考えさせられるところである。

この辺は、無粋な解説はなしにして、読者が自由に探索していくと、読み手は遡って深く日本の文化や歴史、さらには現代の日本や世界の構造にまで思いや想像がめぐり、日本や世界のこれからの望ましいかたち、構造とは、どのようであればいいのかにまで、思いが至るかもしれない。

後半と最終章は、真に隠された神、「ヒルコ」に割かれている。日本神話の神々のなかから捨てられた「ヒルコ」―〈強い男性性のテーマ〉を忍ばせる神「ヒルコ」について、河合隼雄は熱く語り問いかけてきている。そのことは簡

単には答えの出でこない、日本人、日本文化の抱えてきた大きな課題であるかもしれない。第三部、「解題」「河合隼雄と日本神話」で河合俊雄はその点を取りあげ分析しつつ、そのことは河合隼雄が我々に残し、託した最大のテーマでもあると考えたりしているところである。

初めに、三部の解説から読み解き、一部、二部と読み進みことをお勧めしてみたが、蛇足ながら三部、二部、一部と、後ろから徐々に原典を遡るという読書の方法も、この書にはふさわしく良き方法かもしれないとここまで紹介してきて思い至ってきた。

この著書は、文化論として、日本人のテーマ、日本を考察してみるものとして、歴史的な観点を思い起こしながら読み込んでいくととても興味深いところであるし、河合隼雄がそうであったように「わたくし」、個人を考えて読んでみても深く味わうことができる著書として、3部作の中では一番手軽ではない著書ではあるが、読み応えのある一冊として、ここにご紹介する。

ちなみに、河合隼雄はそれ迄も1980年以降、折りに触れて日本神話の中空構造について記したり、NHKのテレビ講座で語ったりしているが、一書にまとめたものとしては最晩年の2003年、「神話と日本人のこころ」として初めて岩波書店からこのテーマでの著書を出版している。それまで河合隼雄は多くの著書を世に生み出しつづけたが、この主題に関しては1964年の資格論文から年月を経て、長きにわたりこのテーマを暖め追求しつづけて、人生の最後の時期にここに書き記したものである。あわせて、こちらもお手に取られてみることをお勧めしたい。

最後に、宗教や仏教関連の書をご参考までに何冊か参考文献として記しておく。河合俊雄は、河合隼雄の著書のなかで「ユング心理学と宗教」が最も深みのある書であると述べている。又、鎌倉時代初期の名僧、明恵の夢記を取りあげたものに「明恵 夢を生きる」がある。明恵については河合隼雄は、日本で唯一師と呼べる人に巡り合った、と称している。

参考文献

『宗教と科学の接点』岩波書店、1986年

『明恵 夢を生きる』京都松柏社、1987年

『ユング心理学と仏教』岩波書店、1995年